

五月七日（日）

土砂降りの雨の中、オフィスに赴いて端末を立ち上げてみたものの、何らかのレスポンスがあるはずもなく、世間は当たり前のようにゴールデンウィークを楽しんでいるらしい。受信ボックスを確かめても、Stackを立ち上げても、目ぼしい未読は見当たらない。

椅子の背もたれにグツと体重を預け、モニターを付けっぱなしにしたまま目を閉じる。普段はラジオの音やら、電話のコールやらが聞こえてくるのに、今日は空気清浄機の音が微かに聞こえるだけ。窓の外から聞こえてくる雨の音、表通りを走る車の音が心地よく混ざり合う。

目を閉じて、雨の音に耳を濟ませる。音に誘われてゆったり船を漕いでいると、だんだん大きくなってくる足音が聞こえてきた。どうやら、誰かがドアの向こうで立ち止まったらしい。立ち止まった誰かはドアを開け、明かりをつけた。

「おお、哲朗くん」

急な明るさに目を細めながら、身体を起こす。呼びかけられた哲朗はビクツとして、こちらを見た。

「何だ、社長か」

「何だとは、何だ」

哲朗はへらへら「すみません」と笑った。自分の席へ行って、端末を立ち上げる。

「ゴールデンウィークの最終日なのに、『こんなところ』で居眠りですか？」

「そういう君の方こそ、『こんなところ』に何の用だ？ 一朗さんの祝勝会ぐらい、出たんだろうな」

「多選の地方議員なんて、一々祝ってられませんよ」

端末が立ち上がると、哲朗は早速自分の作業に取りかかった。その口振りでは、この連休も実家には帰っていないようだ。例の練習動画には彼の妹の姿もあったから、あちらからは来ているようだが、明子さんからも特別にメッセージが飛んできている気配はない。

「何か、仕事頼んでたっけ？」

彼はモニターを忙しそうに眺め、何度かマウスをクリックした。「いや、特に  
はなさそうですね」と、手にしたハードディスクを差し込んでいる。

「明日からまたしばらく来れそうにないんで、持ち出しちゃってもいいですか？」  
「ああ、いいよ」

どうせ、機密らしい機密も大してない。彼の出先で開かれて困るような資料、  
データも特にない。彼は手早くマウスを動かし、必要なデータを移していく。代  
わりに、Youtubeへの動画アップロードも進めているようだ。

「この間の、茨音はどうだった？」

「社長は見えてないんですか？」

「現場にはいたんだけどね。本部でバタバタしてたからさ」

彼は手元のハードディスクに手をやる。

「今ちようど、その映像をアップロードしてますから、あとでまた見てください」

「え、もう編集も終わってんの？」

哲朗は頷いた。

「ちゃんと、浪川瑞希の監督、編集で見応えある動画に仕上がってます」

いつもの練習動画は撮ったままの映像だったけど、今回はしっかり手を加えた  
ようだ。何やかんやで監督も急遽でステージに上らされたのに、事前にきっちり  
連携取って、過不足なく撮れたのだろうか。

「それは楽しみだな」

哲朗は「今回ののは、公開してもいいレベルです」と力強く頷いた。公開、は二  
の足を踏んでしまうけど、いい酒が飲めるかもしれない。「どうだ、哲朗くん。」

この後、一杯行かないか？」

「すみません。この後、予定があって」

彼は申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

「忙しいねえ。さすがは、できる男」

彼は「いえいえ、そんな」と言いながらも、満更でもなさそうな表情を浮かべ  
ている。頼もしくもあり、末恐ろしくもあり。前途洋々の若者を見守りながら、

この後どうしようか、思いを馳せた。

初出 令和三年五月一四日 カクヨムにて公開